第 48 回　北海道地方会

会長／並木正義
会場／北方圏センター
日時／昭和 59 年 5 月 12 日（土）

1　食道潰瘍に巨細胞封入体を有した成人 T 細胞白血例の 1 例

勤医協札幌病院　内科　○河島　秀昭
佐藤　忠直・仲谷　了・大城　忠
今津　純夫・山口　修史・升田和比古
勤医協中央病院　病理科　佐々木　豊

2　内視鏡にて発見し摘出した棘口吸虫症の 1 例

札幌医科大学　第 1 内科
○平田　博巳・斉藤丹羽子
小樽協会病院　内科
小池　容史・河村　薫・関山　伸男
勤医協中央病院　病理　小玉　孝郎

3　興味ある免疫学的所見を呈した胃リンパ腫の 1 例

札幌厚生病院・消化器内科
○坂井　洋一・宮坂　史路・櫛部　朗
目黒　高志・西沢　正明・近間　敏治
堀田　彰一・塚越　洋元・八百坂　透
須賀　俊博・村島　義男

4　Intraluminal Duodenal Diverticulum (IDD) の 1 例

国立札幌病院・道がんセンター　消化器科
○今村　哲理・加藤　茂樹・門野　清
別役　孝・井林　淳

5　内視鏡下に切除回収しえた十二指腸腺腫の 1 例

深川市吉田病院　○吉田　清・吉田　紘一

6　12 年間経過を追えた十二指腸脂肪腫の 1 例

北海道勤医協札幌病院　内科
○佐藤　忠直・河島　秀昭・辰巳　研一
大城　忠・山口　修史・升田和比古

7　内視鏡下に診断し得た十二指腸嵌頓胆石イレウスの 1 例

旭川厚生病院　内科　○男澤　伸一
蘆田　知史・斉藤　裕輔・古河　知行
横田　欽一・佐々木春喜・福井　実
都丸　久・折居　裕・峯本　博正
成澤　恒男・杉村　巌・小西　行夫
旭川医科大学　第 3 内科
岡村毅与志・並木　正義

8　内視鏡的乳頭括約筋切開術による総胆管結石の治療経験

市立美唄病院　内科　○後町　洋一・山田　雅弘
札幌医科大学　第 4 内科
荒谷　英二・馬原　克夫・対馬　伸泰

9　局在性肝病変の超音波腹腔鏡による画像診断
勤医協中央病院

○美馬　聰昭・鈴木　豊・田辺　利男
水尾　仁志・金河　博史・佐々木　豊
札幌医科大学　検査診断部　福田　守道

10　膵管胆道合流異常をともなった胆嚢 Abenomyomatosis の 1 例

市立旭川病院　内科
○池　薫・奥山　修児・長嶋　知明
柴田　好・武藤　英二・武田　章三
旭川医科大学　第 3 内科
上田　則行・並木　正義

11　当科における ERBD の検討―とくに EREBD (nasobiliary drainage) の有用性について

札幌厚生病院　消化器内科

○近間　敏治・宮坂　史路・櫛部　　朗
目黒　高志・西沢　正明・坂井　洋一
堀田　彰一・塚越　洋元・八百坂　透
須賀　俊博・村島　義男
愛育病院　消化器科　　開田　博之・三和　公明

12　総胆管拡張症（Alonso-Lej-type Ⅰ）に膵胆管合流異常を伴った妊娠膵炎の１例

札幌医科大学　第１内科　　○内山　久士
市立釧路総合病院　内科　　石井　禎郎

13　癌化を示した大腸ポリポージスの１例

医療法人唐沢病院　　○高原　和享・唐沢　洋一

14　長期経過観察中出産をもなし得た重症潰瘍性大腸炎の１例

旭川医科大学　第３内科
○原田　一道・林　　英樹・林　　憲雄
水島　和雄・岡村毅与志・並木　正義

15　下血を繰り返し腸重積を呈した小腸平滑筋腫の１例

市立旭川病院　内科
○奥山　修兒・柴田　　好・池　　薫
武藤　英二・武田　章三
同　病理　　神田　　誠
旭川医科大学　第３内科
原田　一道・上田　則行・並木　正義

16　抗生物質起因性大腸炎の４例

北海道大学　第３内科　　○内田多久實
斉藤　雅雄・曽根崎　聡・立花　法子
木村　健二・真栗　　真・高橋　博道
浅香　正博・宮崎　　保・高橋　健二
余市協会病院　内科　　橋野　　聡・谷川　淑郎

第48回　北海道地方会

会長／並木正義
会場／北方圏センター
日時／昭和59年5月12日(土)

1　食道潰瘍に巨細胞封入体を有した成人T細胞白血病の1例

勤医協札幌病院　内科　○河島　秀昭
佐藤　忠直・仲谷　了・大城　忠
今津　純夫・山口　修史・升田和比古
勤医協中央病院　病理科　佐々木　豊

成人T細胞白血病の経過中に，巨細胞封入体を有した食道潰瘍を経験し，剖検する機会を得たので報告する．

患者は41歳男性で，1982年1月頃より顔面の紅潮，全身倦怠感をもって発症，9月25日に入院となる．経過中，入院10カ月目に心窩部痛を訴え内視鏡検査を施行したところ，ECJ直上に¼周を占める潰瘍がみられ，生検にてサイトメガロウィルス感染を裏付ける巨細胞封入体を認めた．他の消化管には著変を認めなかった．入院13カ月目の1983年10月7日死亡となる．

2　内視鏡にて発見し摘出した棘口吸虫症の1例

札幌医科大学　第1内科
○平田　博巳・斉藤丹羽子
小樽協会病院　内科
小池　容史・河村　薫・関山　伸男
勤医協中央病院　病理　小玉　孝郎

寄生虫の一種である棘口吸虫は，人体へ寄生するものでも12種以上が知られているが，その病原性はほとんどが知られていない．今回，体重減少，食思不振を主訴に来院した72歳の女性に内視鏡検査（GIF-P_3）を施行し，十二指腸に寄生する棘口吸虫を見い出し摘出した症例を経験した．棘口吸虫は発育に2個の中間宿主を必要とし，第2中間宿主である貝類，川魚，ドジョウなどの生食により人体へ寄生する．その他，犬，キツネ，野ネズミ等へ寄生する．100例以上の人体寄生の報告があるが，北海道での報告は認めていない．内視鏡検査が盛んに施行されるにつれ，この様な症例が増加すると思われる．

3　興味ある免疫学的所見を呈した胃リンパ腫の1例

札幌厚生病院・消化器内科
○坂井　洋一・宮坂　史路・櫛部　朗
目黒　高志・西沢　正明・近間　敏治
堀田　彰一・塚越　洋元・八百坂　透
須賀　俊博・村島　義男

患者は77歳女性．主訴は下血・貧血で，胃Ba，内視鏡検査にて胃噴門部前壁にBorrmann II型様陥凹性病変があり，生検・細胞診にて悪性リンパ腫と診断，手術した．肉眼的には粘膜下の要素を主体とする，ヒダの集中を伴う潰瘍性病変で，組織学的には，核の切れ込みを有する中型の異型細胞がdiffuseに増殖しており，境界不明瞭な濾胞を伴っていた．免疫組織学的には，interfollicleではIgM・κ陽性細胞が90%を占めていたが，Follicular Center Cellsはκ・λ両方のmarkerが陽性で，反応性濾胞を合併したB-cell lymphomaであると考えられた．

4　Intraluminal Duodenal Diverticulum（IDD）の1例

国立札幌病院・道がんセンター　消化器科
○今村　哲理・加藤　茂樹・門野　清
別役　孝・井林　淳

IDDは胎生期遺残の不完全十二指腸隔膜が蠕動等により管腔内に袋状に発育したものと考えられている稀な消化管先天異常である．

（症例）KN，22歳，女性．（主訴）上腹部・背部痛．既往歴・家族歴に特記すべきことなし．

昭和55年4月9日初診．UGI検査で十二指腸下行脚管腔内に袋状の陰影を認めIDDと診断．同年7月23日内視鏡的切除を行い，若干の症状軽快をみたが時に腹痛出現するため昭和56年1月27日残りの憩室を外科的切除した．今回は残念ながら内視鏡的治療のみでは満足すべき効果が得られなかったが，文献的には内視鏡的切除で治ゆせしめた例もあり，本疾患に対しては積極的に内視鏡的治療を試みるべきと考える．

5　内視鏡下に切除回収しえた十二指腸腺腫の1例

深川市吉田病院　○吉田　清・吉田　紘一

十二指腸下行脚にみられた有茎性腺腫を内視鏡下に切除回収しえた症例を経験したので報告する．

患者は66歳の女性．心窩部痛を主訴に来院．上部消化管レ線検査にて十二指腸下行脚に拇指頭大類円形の腫瘤陰影がみられ，内視鏡検査で同部に山田IV型表面顆粒状の隆起性病変を認めた．有茎性なので内視鏡的ポリペクトミーを行うことにした．回収を確実にするために自作のバルーンカテーテルを予め内視鏡下に十二指腸下行脚の肛側部に留置後GIF-P_3で切除しバスケット鉗子で回収した．切除標本は20×18×15 mmで組織的には十二指腸粘膜上皮の増殖からなる腺腫で，乳頭状および絨毛状の増殖を呈していた．

6　12年間経過を追えた十二指腸脂肪腫の1例

北海道勤医協札幌病院　内科
○佐藤　忠直・河島　秀昭・辰巳　研一
大城　忠・山口　修史・升田和比古

十二指腸球部に見られた粘膜下脂肪腫を12年間経過観察し経内視鏡的に切除した症例を経験したので報告する．

症例は53歳の女性．胃の精査を希望し昭和46年当院受診．上部消化管X線検査及び内視鏡検査にて，十二指腸球部に山田IV型の小豆大の隆起性病変を認め症状がな

いため経過観察していたが，昭和58年内視鏡的ポリペクトミー施行し20×12×11 mmのポリープを摘出した．病理組織学的検索により脂肪腫と確定した．

7　内視鏡下に診断し得た十二指腸嵌頓胆石イレウスの1例

旭川厚生病院　内科　○男澤　伸一
蘆田　知史・斉藤　裕輔・古河　知行
横田　欽一・佐々木春喜・福井　実
都丸　久・折居　裕・峯本　博正
成沢　恒男・杉村　巌・小西　行夫
旭川医科大学　第3内科
岡村毅与志・並木　正義

症例は69歳，女．悪心，嘔吐，上腹部痛を主訴とし入院．内視鏡検査にて十二指腸球部に嵌頓している胆石と胆嚢十二指腸瘻の瘻孔が確認された．イレウス症状が出現したため手術が行われ，トライツ靱帯を越えた部位に6.0×4.0×3.0 cm大のコ系石と総胆管内に11個の小結石を認めた．最近1年間で当院では，本例もふくめ5例の内胆汁瘻症例を経験しており，全例に内視鏡にて瘻孔が確認された．これらは中高齢者で，全例に胆道原性疾患を有しており，うち3例は入院後はじめて発見された．今後中高齢者の胆石症をとり扱う際，本症の可能性も念頭におく必要がある．

8　内視鏡的乳頭括約筋切開術による総胆管結石の治療経験

市立美唄病院　内科　○後町　洋一・山田　雅弘
札幌医科大学　第4内科
荒谷　英二・馬原　克夫・対馬　伸泰

内視鏡的乳頭括約筋切開術は，総胆管結石の治療のみならず，胆汁うっ帯を示す疾患の診断，治療に応用されている．われわれも，胆のう摘除後の遺残または再発の結石例に実施してきたが，胆のう非摘除例についても実施しつつある．本法の実施上，超広角の内視鏡が有用であるが，切開用のメスは，その操作性，耐久性などに未だ改良を要する点が多々残っている．切開法としては，十二指腸乳頭の口側隆起の上限近くまで切開する大切開法が主流を占めているが，乳頭のみを切開する所謂小切開法も，小結石の自然排出を可能とするほか，肝機能検査上，胆汁うっ帯を呈する所見の改善に有用であった．

9　局在性肝病変の超音波腹腔鏡による画像診断

勤医協中央病院
○美馬　聰昭・鈴木　豊・田辺　利男
水尾　仁志・金川　博史・佐々木　豊
札幌医科大学　検査診断部　福田　守道

肝癌の早期発見と鑑別診断を目的として超音波腹腔鏡の臨床応用を実施し好成績をえたので報告した．装置は，Olympus LPS-UMI (10 MHZ)，EUMIを使用した．超音波腹腔鏡施行130症例のうち切除例で組織学的に確定診断をしえた微小肝病変を中心に検討した．高解像度断層像で肝血管腫は，高エコー，低エコー，縁どり型ともに独特な隔壁構造の出現により確定診断は容易であった．肝細胞癌では肝硬変の再生結節と異なり，大きさ形態とも極めて特徴的で，いわゆる等エコー，高エコー型がほとんどをしめ，内部エコー像は不均一，モザイク状を呈し，病理学的所見と良好の一致をみた．超音波腹腔鏡は，径1 cm前後の小局在性肝病変の確定診断にきわめて有効であった．

10　膵管胆道合流異常をともなった胆嚢Adenomyomatosisの1例

市立旭川病院　内科
○池　薫・奥山　修児・長嶋　知明
柴田　好・武藤　英二・武田　章三
旭川医科大学　第3内科
上田　則行・並木　正義

患者は35歳の主婦で，昭和58年3月頃から時々右季肋部から背部へかけての鈍痛が出現．増強するため当院を受診した．Echo. CTスキャンで胆嚢壁の全周性の肥厚と拡大した壁内腺腔像を認め，ERCPで胆嚢内腔外縁の斑点状陰影がほぼ全周にわたって造影された．また25 mmの共通管をもつ膵管胆道合流異常が認められた．このため胆嚢摘出術を施行．術中測定した胆嚢内胆汁のアミラーゼは18062 S-Uと高値を示し，組織学的には，腺管増生と平滑筋細胞の束状走行を呈する増生であった．成因として膵管胆道合流異常により，胆嚢内圧の上昇・炎症性慢性刺激がくり返されたという可能性が考えられた．

11　当科におけるERBDの検討ーとくにEREBD (nasobiliary drainage) の有用性について

札幌厚生病院　消化器内科
○近間　敏治・宮坂　史路・櫛部　朗
目黒　高志・西沢　正明・坂井　洋一
堀田　彰一・塚越　洋元・八百坂　透

須賀　俊博・村島　義男
愛育病院　消化器科　開田　博之・三和　公明

われわれは，第26回日本消化器内視鏡学会秋期大会において，ERBDの有用性について報告したが，更に症例数を重ね検討したので報告する．昭和58年3月より昭和59年4月まで，17症例24回に本法を試み，12症例15回に成功した．おもな対象症例は，胆管癌，膵のう胞腺癌Vater乳頭部癌，総胆管結石症などである．12例中，内瘻化したものが9例，外瘻（nasobiliary drainage）が3例である．今後は症例に応じて，内瘻と外瘻の選択が重要であろうと考えられた．

12　総胆管拡張症（Alonso-Lej typeI）に膵胆管合流異常を伴った妊娠膵炎の1例

札幌医科大学　第1内科　○内山　久士
市立釧路総合病院　内科　石井　禎郎

症例：32歳，主婦．妊娠28週．主訴：激しい上腹部痛．入院時肝機能上ALPase, LAP, γGTPが高値．血中リポ蛋白ではLDL 561 mg/dl, VLDL 177 mg/dl,と高値．血中アミラーゼ1050 U，尿中アミラーゼ12050 Uと高値．AccR 9.51，アミラーゼアイソザイムではp分画60%といづれも高値．腹部超音波検査では左肝内胆管の拡張を認めた．胆石はなかった．入院後FOYおよびIVHにより腹痛の消失，アミラーゼ値の正常化を認めたが，胆道系酵素は高値を持続した．胎盤機能は正常．妊娠38週で，女児2,245 gを正常分娩．分娩後胆道系酵素は正常化した．分娩後のERCPで，左肝内胆管，総胆管の嚢腫状拡張を認め，総胆管末端は狭窄像を示し膵管と合流し，その部は十二指腸合流部まで25 mmを示した．

13　癌化を示した大腸ポリポージスの1例

医療法人唐沢病院　○高原　和享・唐沢　洋一

大腸のびまん性ポリポージスとして腺腫性ポリポージスは遺伝性および癌化という問題を含んでおり，家族内発生の証明は重要ではあるが，必らずしも家族内発生の見られない例も多く，癌化傾向は家族内発生の有無とは相関しないことから，大腸ポリポージスを認めた場合には常に癌化を念頭におく必要がある．われわれは癌化を示した大腸ポリポージスを経験したので若干の考察を加えて報告する．症例は41歳の男性で6カ月来の下腹部痛，下痢を訴えて来院．大腸鏡および注腸透視にて全大腸のポリープ多発と下部S状結腸に狭窄像を認め，直腸を除く大腸切除，回腸直腸側々吻合を行なった．病理組織学的には狭窄部より高分化型腺癌を診断した．今後の直腸部のポリープの定期的検査と家族の定期検診が重要であると考え，施行中であるが，現在のところ家族性は認められない．

14　長期経過観察中出産をもなし得た重症潰瘍性大腸炎の1例

旭川医科大学　第3内科
○原田　一道・林　英樹・林　憲雄
水島　和雄・岡村毅与志・並木　正義

症例は初診時，16歳の女性で主訴は粘血便・貧血．昭和51年3月より粘血便が出現し，同年6月には虫垂炎の手術を受けたが自覚症状は改善せず昭和52年11月10日に当科へ入院した．

諸検査の結果，全大腸炎型の重症潰瘍性大腸炎と診断し，ステロイド・サラゾピリンを中心とした内科的治療を続え，以後2回の入院をくり返したが，おもに外来でfollowを行ってきた．昭和58年7月に妊娠が確認され，妊娠中期にR 222万，Hb 3.3 g/dl，S-Fe 14 μg/dlと高度鉄欠乏性貧血を呈し計3560 ccの輸血を受けたが，12月20日帝王切開にて2458 gの女児を無事出産した．妊娠経過中，すべての薬剤は止めていたが，さほど自・他覚症状は悪化しなかった．従来は，本症に対して妊娠・出産は強い増悪因子とされていたが，最近では必ずしも禁忌でなく，むしろ通常と変らず治療を続けても問題ないとの報告が多くなっているが，より慎重な対応が要求される．

15　下血を繰り返し腸重積を呈した小腸平滑筋腫の1例

市立旭川病院　内科
○奥山　修兒・柴田　好・池　薫
武藤　英二・武田　章三
同　病理　神田　誠
旭川医科大学　第3内科
原田　一道・上田　則行・並木　正義

86歳，男性．めまいを主訴に昭和58年7月6日に来院した．強度の貧血と便潜血反応強陽性であり，消化管出血と考え上部消化管緊急内視鏡検査を施行したが出血源不明であった．注腸Ba検査ではS状結腸憩室症を認めるのみであった．12月になり頻回嘔吐下血認めたため，腹部血管造影施行し空腸支配領域に2.5×1.5 cmの腫瘍濃染像認めた．小腸造影ではTreitz靱帯よりやや肛門側に潰瘍形成のある粘膜下腫瘍を認めた．小腸内視鏡検査でも粘膜下腫瘍認め生検したが正常小腸粘膜であった．CT

-scan 像では腫瘍による腸重積と考えられ，術中所見で Treitz 靱帯より 8 cm 部分より 11 cm にわたって腸重積を起こしていた．切除標本は深い潰瘍がある管内発育型粘膜下腫瘍であり，病理組織学的には平滑筋腫であった．

16　抗生物質起因性大腸炎の4例

北海道大学　第3内科　　○内田多久實
斉藤　雅雄・曽根崎　聡・立花　法子
木村　宗士・真栗　　真・高橋　博道
高橋　建二・浅香　正博・宮崎　　保
余市協会病院　内科　　橋野　　聡・谷川　淑郎

最近，抗生物質の繁用が問題となり，また抗生物質起因性大腸炎も注目されている．われわれは抗生物質起因性大腸炎の4例を経験したので若干の考察を加え報告する．

症例1は55歳の男性．主訴は下痢．CLDM 投与後15日目より発熱，下痢出現．CF にて偽膜性大腸炎（PMC）と診断．症例2は73歳，男性．主訴は下腹部痛，下痢．悪性リンパ腫の診断で入院中，CTM，PIPC 投与後6日目より症状出現．CF にて PMC と診断．症例3は48歳，女性．主訴は下痢．CIPC 投与後5日目より下痢，粘血便出現．CF にて PMC と診断．症例4は16歳，男性．主訴は血便．ABPC 投与後4日目より血便出現．臨床経過より抗生薬による出血性大腸炎と診断した．